

イギリス文学と日本文学の比較：試論

—岩尾龍太郎『江戸時代のロビンソン 七つの漂流譚』と
吉村昭『漂流記の魅力』の役割とその意味をめぐって—

An Essay on English and Japanese Literature :
A Comparison between *The Robinson Crusoe in the Edo Period*
and *The Attractive Records of the Japanese Castaways*

北 崎 契 縁

はじめに

2010年度開講のイギリス文学は従来とは違った方法をとった。その理由の一つは、結果論的になるが、中国からの留学生（日本文化専攻）が半数以上受講してくれたことで、イギリス文学の紹介に止まらず、日本文学についても一定の紹介をした方が「日文の学生」には便利であるという思いからであった。もう一つの理由は、筆者が担当している3回生ゼミ（英米の場合は、4回生ゼミにも備えた準備のゼミ＝プレゼミ）のクラスで、ここ3・4年に亘って松岡正剛の著作を講読・発表という形を取って繰り返し読んだことにある。

松岡は自身が1998年4月から担当することとなった帝塚山学院大学の人間文化学部の講義録を『17歳のための世界と日本の見方』にまとめ、世に問うているが、このテキストはまさに現代の大学生、殊に人文学部の学生にとっては必読の書となったといっても過言ではあるまい。特に、この書の帯の一節は、人目に付きやすいだけに実に刺激的である¹⁾。

……なぜか日本人は仏教のことも、着物のことも、三味線のことも知

1) 松岡正剛『17歳のための世界と日本の見方』（春秋社、2006年）

らなくなってしまったのです。伊勢神宮や床の間や、連歌やむ国学や日本の数学者のこともあまりよくわかってはいません。それだけでなく、日米安保条約が何を足枷にどれくらい続くのか、中国がどんな現代史のなかにいるのか、世界中のマグロと日本はどうつながっているのか、そういうこともわからない。こういうなかで、私たちは何を感じたり、考えたりすればいいのか……

筆者が初めて『17歳のための世界と日本の見方』という書名と帯の一文を見たとき、今の若い人ならさもありなん、くらいに考えていたのであるが、その一方で、長年イギリス文学に親しんできた筆者としては別の感慨を抱いたことも確かである。それは、自らの立ち位置にある「日本文学」を本当に知っているのであろうかという疑問であり、不安感であった。そんな折に出会ったのが高山宏である。高山によると、日本人の学んでいる英文学が果たしてどのような位置に現在あるのか、日本人が学んでいる英文学そのものに対する疑問を持つべきであるという鋭い指摘であった²⁾。こうなると、日本文学はもちろんのこと、長年親しんできた英文学に対しても何とはなしに不安を感じざるを得なくなって、言わば袋小路に入り込んでいたのである。

英文学に対しても日本文学に対しても不安を抱えていたとき、前期 15 回の講義日程の終了間際になって「窮すれば通じる」という諺通り、実に刺激的な書籍との出会いがあった。それは、岩尾龍太郎『江戸時代のロビンソン 七つの漂流譚』（新潮文庫、平成 21 年）という文庫本であった。筆者が担当した今年のイギリス文学は、イギリスと日本の類似点・共通点に焦点を絞ることにして、キリスト教のイギリスへの伝来と仏教の日本への伝来とがほぼ同時期であったこと、また同時に『古事記』と『旧約聖書』の「創世記」との比較を行うことから始めた講義であった。そうして漸く 17 世紀から 19 世紀にまでこぎ着け、『ロビンソン・クルーソー』について講義をしようと考えていた矢先に、先の岩尾との出会いがあった。

2) 高山 宏『近代文化史入門 超英文学講義』（講談社学術文庫、2007 年）

心待ちにして入手した『江戸時代のロビンソン 七つの漂流譚』は小冊子ながら、「はじめに」、そして特に「あとがき」をちらっと読んでみて、これは実に面白く、刺激的な一冊であることがすぐに判明した。しかし、岩尾自身は漂流記録を読んでゆく上での困難性について正直に吐露している。実際漂流記の文章は、岩尾自身にとっても、当然「くずし字辞典」も必要だし、「古文書学」のクラスにも出て、江戸時代の水主（船乗り、水夫）の文章を読むための勉強をしなければならなかったからだ。しかし残念ながら、岩尾のサービスにもかかわらず、現代の私たちにはやはりその文章を読むのは大変難しい。その辺りをどう評価するかが、この本の評価の分かれるところであろう。確かに「悲しくも滑稽にして雄々しい漂流事例はそれ自体、古典として伝承すべき内容をもつ。また音読すればお分かりのように、今日の間延びした文章と違って、江戸時代の文章は引き締まった韻律を持つ。できるだけ原文の息吹を残しつつ、読者の胸に届けたい」（傍点筆者、以下同じ）と、その熱意は伝わってくるが、実際に読んでみるとこれがなかなか難しく、正直しんどい。

それでも、筆者にとって2010年度イギリス文学の講義の1番の成果は、岩尾の著作との出会いであったことも確かである。その理由について以下本論で整理しながら論じてみたい。そして岩尾の著書との出会いをきっかけに、もう一つの成果もあった。それは、作家吉村昭の著作との出会いである。実作者である吉村は岩尾とは違い、原点である漂流記の原文を彼なりに読み解き、咀嚼して、フィクションとして「現代文」で世に問うている。筆者などのような素人には、吉村の作品を読む方が遙かに興味が沸き、小説を読むことの楽しさが満喫できる。そこで、岩尾の『江戸時代のロビンソン 七つの漂流譚』と、吉村の漂流記の集大成とも言える「漂流そのもの」について書かれた『漂流記の魅力』を併せて組上に載せ、同じ漂流記ものについて、それぞれの長所・短所を抽出しながら比較を行ってみたい。そして両書の長所・短所をそれぞれについて検討し、両書に欠けているものがあるとなれば、それは何か、何故かという問に答えてみたい。

第1章 『江戸時代のロビンソン 七つの漂流譚』について

岩尾は『江戸時代のロビンソン 七つの漂流譚』の冒頭を「はじめに——『海の論理』」から始めている。次いで序章では「漂流の背景『鎖国の本質／太平洋長期漂流の発生』」について記述している。そして漸く第1章「無人島漂着編 鳥島サバイバル^{トリシマ}」で具体的な漂流・漂着の例として、〈ロビンソンの行動〉を取った船乗りの話を3話用意している。そして最後の第2章は「異国漂着編」と名付けて、5話用意し〈ガリバー的なパフォーマンス〉を紹介している。特に、ロビンソンの行動とガリバー的なパフォーマンスという興味深い視点は、当然イギリス文学に通暁していないと出てこない。ここに、吉村との決定的な違いがある。

以上のように「目次」を見ているだけで岩尾の意図が一目瞭然的に伝わってくる。第2章で論じることとなる吉村昭の『漂流記の魅力』と比較すると、岩尾の場合は如何にも研究者らしい論述の仕方（漂流記からの引用文とそれに対するコメントといった、論文形式で一貫していること）であることが分かる。一方の吉村は実作者らしく、「漂流」について書くといいながら実際は「若宮丸」という船とその水主たちの辿った漂流の軌跡を、想像力を交えて小説らしき形にしている。後者については第2章で詳しく見ることにし、今は岩尾の『江戸時代のロビンソン 七つの漂流譚』に集中しよう。

先ず序章であるが、表題「漂流の背景」が物語るように、焦点は「鎖国の本質／太平洋長期漂流の発生」にある。しかしここで注意しておかねばならないのは、「鎖国」という言葉の由来である。この言葉は、1727年に出版されたケンペルの『日本誌』第1章「今の日本人全国を閉ざして国民を国中国外に限らず敢えて異域の人と通商せざらしむる事、実に所益なるに与れりや否や」が1801年、志筑忠雄により『鎖国論』として翻訳されたときに生まれた言葉である。つまり「鎖国」という言葉自体、元々ドイツ人の医師で長崎出島のオランダ商館に勤務したドイツ人医師ケンペ

ル³⁾が名付けた言葉であった。しかし、17世紀の日本の実態は必ずしも「鎖国」一点張りではなかった。イギリスと似て、周囲を海に囲まれた日本が完全な閉鎖を期待すること自体が不可能であったからだ。その証拠に、幕府は常に四つの口を開いていた。①琉球に対する薩摩口 ②蝦夷地に対する松前口 ③中国、オランダに対する長崎口 ④朝鮮に対する対馬口の四つを開いていたからである。それ故に、江戸時代は鎖国一点張りであったとはとてもいえないのである。この四つの「口」から分かることは、幕府は貿易を端から禁止するのではなく、商品などの輸出は推奨していたのである。しかし、いつの時代でも権力者はその勢力の転覆を計ろうとする異端分子の台頭を恐れるのである。特に幕府にとって島津藩などは目の上のたんこぶであった。というのも、島津藩は地勢的に近い琉球征服を企てていたからである。所謂外様大名、特にキリスト教の伝来と共に西洋の威力を学んだ西国大名は是が非でも牽制しておく必要があった。例えば、島原の乱（島原・天草一揆）、あるいは島原・天草の乱とも呼ばれる事件があった。事件は、寛永14年10月25日（1637年12月11日）勃発、寛永15年2月28日（1638年4月12日）に終結したとされている。以降、キリスト教の禁止の必要性を感じた幕府は、ポルトガル船の来航を禁止する。さらに平戸のオランダ館の閉鎖が行われ、長崎出島の「牢獄」に等しい木造家屋に商人たちを閉じ込める。これ以降、幕府は俗に言う「禁制の品」の輸入などに目を光らせることとなる。

3) エンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kaempfer、現代ドイツ語読みではエンゲルベアト・ケンプファー、1651年9月16日－1716年11月2日)は、ドイツ北部レムゴー出身の医師、博物学者。ヨーロッパにおいて日本を初めて体系的に記述した『日本誌』の原著者として知られる。ケンペルは著書の中で、日本には、聖職的皇帝(=天皇)と世俗的皇帝(=将軍)の「二人の支配者」がいると紹介した。その『日本誌』の中に付録として収録された日本の対外関係に関する論文は、徳川綱吉治政時の日本の対外政策を肯定したもので、『日本誌』出版後、ヨーロッパのみならず、日本にも影響を与えることとなった。また、『日本誌』のオランダ語版 (*De Beschryving Van Japan*) を底本として、志筑忠雄は享和元年(1801)にこの付録論文を訳出し、題名があまりに長いことから文中に適当な言葉を探し、「鎖国論」と名付けた。日本語における「鎖国」という言葉は、ここに誕生した。

いずれにしても、当時の「鎖国」とは「国を閉じること」ではなく、幕藩体制の統制と連動した貿易・交通・情報をコントロールしようとするのがその実態であった。ここから生まれたのが、形式主義的な官僚主導と民間の自主規制の網の目のような存在であった。こうして 21 世紀の今日の日本でも猖獗を極めていけると言える日本人の性癖・特色が生まれる。つまり、ベンチャー的な仕事をする人間に対して冷たい日本的な社会が出来上がったと、岩尾は整理している。そして最後にもう一点、鎖国と連動して使われる「封建制」にも注意する必要があるという。というのは、江戸時代の封建制と鎌倉幕府の御家人体制との違いの明確化が必要だからだ。結論的に言えば、前者は、それまで曖昧であった身分を固定化した点に特徴がある。つまり「士農工商」の誕生である。特に武士は武士道を押つけられ、生産現場から切り離されて城下町に住むことを強制された。その結果、江戸は「商業」中心の町となる。

さらに各藩主は江戸へ隔年滞在を強制され、封土の経営から遊離した。百姓から年貢米を換金した分の六割は、参勤交代、江戸の定府（藩屋敷）維持の費用に充てられ、稲作は疲弊していった。……幕府の狙いは外様雄藩の富の蓄積を蕩尽せしめることだったが、非生産者層が百万人も集住する江戸の存在と、その江戸へ全国の物資を集める流通網は、タマエとしての「封建制」、すなわち封土における自給自足体制を掘崩してゆく。……商業を前提としながらその発達を否定した幕藩体制の基本矛盾は、内海や河川交通にとどまらぬ海運を必要としながらその発達を抑制した江戸期の交通の基本矛盾として現れる。（岩尾龍太郎『江戸時代のロビンソン』、pp.27-28）

「商業を前提としながらその発達を否定した幕藩体制の基本矛盾」が、商業的な目的で日本の海岸沿いに行き来した廻船（和船）の船体構造を軟弱なたちのままにし、その結果様々な「漂流」という悲劇的な現実を出来ることとなった。廻船の遭難多発の要因 1 として岩尾は「造船技術の停滞」、要因 2 として「外洋航行技術の未発達」、そして要因 3 に「情

報・経験交流の欠如」の三つを挙げている。しかし、なぜ日本がそのような事態を生み出したかについて、その理由を岩尾は幕藩体制の欠陥にあったとして、それ以上追求していない。この点が筆者などは不足感を感じるのである。

しかし、船の発達の歴史は残念ながら、日本よりはヨーロッパの方が早くからその恩恵に浴していたようである。なぜだろうか。加藤憲市⁴⁾は「船と海事」に200頁近くを割いて、ヨーロッパを中心とした人類と船との関係、発展の歴史を壮大なスケールで描いている。その序「丸木舟から蒸気船」が象徴的に物語っているように、当然この中には日本人も同じ船の歴史を辿ってきたはずである。しかし、所謂「大航海時代」をついに日本人は体験することはなかったのである。そのような島国日本に対して、特に聖地エルサレムをイスラム教徒から奪回するためにヨーロッパ各国は連合遠征軍を組織・派遣するという大規模な戦争を行っていた。所謂「十字軍の遠征」である。結果的には十字軍遠征は失敗に終わったようであるが、イスラムという異文化に触れたヨーロッパ人にはたくさんの副産物があった。その一つが中世ヨーロッパ世界では失われていた自然科学の再発掘であった。特に、遠征に必要な戦術、造船工学、船舶の艤装、航海技術などについて、各国間で知識の交換・交流が盛んに行われた。こうして生まれたのが、‘Maritime Republic’（海運共和国）と言われるイタリアのベネチア・ナポリ・ジェノバなどの謂わば「商業国家」であった。もちろん、元々活発であったアラビア人の交易活動は中近東の陸上ばかりでなく、地中海海域から、西はスペイン、アフリカにまで及んだ。時には海賊船となってキリスト教国側の貿易船は攻撃を受けることが多々あった。これに刺激を受けたヨーロッパ人が彼らに負けじと、さらなる新海路・海域を求めたのは当然であった。こうして「大航海時代」が幕を開けることとなる。先ずスペイン・ポルトガルが、少し遅れてフランス・オランダ・イギリスなどが後に続く⁵⁾。

4) 加藤憲市『イギリス古事物語』（大修館書店、1994年）

5) 松岡正剛著『NARASIA 日本と東アジアの潮流』（丸善、2009年）によると、源頼朝の鎌倉幕府（1192年）から徳川慶喜の大政奉還に及ぶ

このようにヨーロッパ、イスラム、アラビアなどを含む広大な地域の人々の活発な動きは、せいぜい白村江の戦い⁶⁾位が海戦と言える経験だけの日本という極東の島国には生まれ筈もなかった。しかし、このような世界史的な視点が残念ながら岩尾の論には見られない。この突っ込み不足は免れ得ないが、強いて言えば、先述したように「情報・経験交流の欠如」という三つ目の理由がそれに当たるかも知れない。「漂流記録の出版例」という項目で、岩尾は「海外情報集約のための『通航一覧』の編纂は漸く幕末 1853 年になってからである」と言い、そのような日本の状況と比較するような形で、

これに対して、たとえば英国では、欧人の代表的な航海、遭難記録がハクルート・バーチャス叢書のような形で出版され、船のキャビンに備え付けられた。船室に集う士官層は過去の事例から学ぶことを要請されたのである。新たな航海による情報は、英国王立協会（Royal Society）や海軍省（Admiralty）といった中枢に集約された。彼我の差は大きい。（同書、p.59）

と、情報の収集とそれを公開して、航海の安全性に努めるという英国の姿勢はついで日本には見られないとしている。それどころか、海外から無事送り返された船乗りは、禁制の切支丹に転向していないかどうかなどを厳

6) 700 年間の武家政権の世は「風の世」と名付けられている。この風の世は、大航海時代の技術と成功を背景としてヨーロッパが次第にアジアに向かってきた時代でもある。またモンゴルとイスラムの風が東西に吹き荒れ、それに対抗しようとしてヨーロッパでは宗教改革・市民主義・資本主義とネーション・ステートが出来上がりつつあった。もちろん、新大陸アメリカという文明の準備の期間にも当たる。ここで大事なのは、こういったヨーロッパ型の文明はついでアジアでは試されることはなかったことにある（下線筆者）。1840 年のアヘン戦争、1853 年の黒船来航がヨーロッパ列強との手痛い最初の出会いであった。太平天国と尊皇攘夷は解体の憂き目を見ることとなる。

6) 白村江の戦い 663 年、白村江で、日本・百済連合軍と唐・新羅連合軍との間に行われた海戦。日本は、660 年に滅亡した百済の王子豊璋を救援するため軍を進めたが、唐の水軍に敗れ、百済は完全に滅びた。

しく問い詰められたりして、幕末に至るまでせつかくの「情報」は伝達・公開されることがなかった。例えば伊勢白子神昌丸の大黒光太夫はアリューシャン列島のアムチトカ島に漂着して四年間も生き延び無事帰国したにもかかわらず、二度と船乗り稼業は禁止され、「外国の様子、猥りに物語り抔致さず候様仰せ渡され」て、小石川の薬草付場で「植物の手伝ひ」を命じられている。これは体の良い終身禁固刑である、と岩尾は憤りすら感じられる口吻で述べているが、筆者も同感である。

しかし、先ほどの岩尾の引用文中にあった英国王立協会（Royal Society）については、一言述べておきたいことがある。1660年設立のこの協会は、モットーはラテン語で「言葉によらず」であった。これは古代ローマの詩人であるホラティウスからの引用で、原文は“Nullius addictus iudicare in verbamagistri”（「権威者の伝聞に基づいて（法廷で）証言しない」）つまり（聖書、教会、古典などの）権威に頼らず証拠（実験・観測）を持って事実を確定していくという近代自然科学の客観性を強調するものである。この協会の設立は、以後のイギリスだけでなく、あるいはイギリスを発祥の地として、近・現代科学の生みの親となった事実は否定しようがない。新たな航海による情報などの収集は協会の当然の仕事であった。それはそれで後の航海技術の発展に大きな貢献をしたことは疑いようがない。とはいえ、科学を金科玉条に掲げる協会にも、行き過ぎから来る欠陥が具わっていたのである。

例えば、同じ「情報」でも、こと文学になると、言葉の厳密性を求める協会の基準はとんでもないことを要求することとなるからである。かの有名なシェイクスピア劇の台詞が「曖昧」であるとして彼は協会から断罪される。そうして、17世紀にはシェイクスピアは一時英文学の世界から姿を消してしまうのである。その象徴的ともいえるのが「曖昧性」つまり‘Ambiguity’の捉え方の変化にある。少なくとも、1600年代にシェイクスピアの英語は曖昧（ambiguous）であるとして断罪されていたのだ。しかし、時代が下ると、‘Ambiguity’を「曖昧性」と捉えるか「多義性・両義性・多義性」と捉えるかで一気に世の人の人生観は変化する。漸く、20世紀に入ってシェイクスピアは「多義的」として評価をうけることと

なる⁷⁾。曖昧性を目の敵にした王立協会、その王立協会の会員の一人あったニュートンのことから説き起こして、高山宏は次のように実に興味深い事実を記している。

シェイクスピアの没後四十年くらいして、「自然知を促進するためロンドン王立協会」はアンビギュアス (ambiguous) な英語を目の敵にするようになった。この王立協会は4代目総裁がニュートンであることから知れるが、自然科学者の集団である。(『近代文化史入門、超英文学講義』、p.38)

彼らは『ハムレット』の冒頭部分に出てくるハムレットの有名な台詞「アイ・アム・トゥー・マッチ・イン・ザ・サン」に対してクレームをつける。劇の冒頭はハムレットが父の亡霊を見るところから始まるが、とにかく彼は「ふてくされている」。おじはそんな甥を見て「おまえはいつまでビナイテッド(夜の服=喪服)な服を着ているのだ。そろそろ喪もあけるし、着替えなさいと言われる。」その直後に先ほどの台詞が吐かれるのである。ハムレットの言葉を聞いた時、‘I am too much in the sun (or son)’と当時の観客は耳にしたはずである。ここでは()内の‘son’に注目すべきである。つまり当時の観客は活字ではなく、俳優の「肉声」を聞いていたのであるから、人によっては‘sun’と聞き、また別の観客は‘son’と聞いたかも知れないのである。確かに‘too much in the sun’で「気が触れて」という熟語がある。しかし、耳だけが頼りの時代であったればこそ、ハムレットが付くべき王位を伯父が無理矢理篡奪したことを、正統の後継者であるべきハムレットが当てこすりに言っているはずだと思えば、‘sun’ではなく‘son’(息子)と解釈し、「おまえのおかげで、いつまでも息子の立場にいなきゃいけない」という怒りを言い表したと感じた観客もいたはずである。あるいは、‘sun’と‘son’の二つの意味を同時的に聞き取り、両方の意味を理解した観客もいたのではないか。現在では活字

7) シェイクスピア・リヴァイヴァルについては、1960年代に出た山口昌男の『本の神話学』を契機に一気にその運動が進んだ。次の注8を参照。

がすべてだと思っているが、元々は「口承」で意思伝達が行われていたはずだからである。このような結果、王立協会が本来豊であった筈の言語に普遍化運動に似た制限を加えることとなったのである。いずれにしても英国王立協会は、得るところも多かったが、失ったものも多々あったのではないかということに尽きる。まさに「両義性」をしっかりと見つめる必要性が出てきたのが20世紀という時代⁸⁾であったが、21世紀の現代にも必要であろう。

ここで再び江戸時代の漂流記の話題に戻ろう。「外国の様子、猥りに物語り杯致さず候様仰せ渡され」た帰着人は、結局自らの貴重な体験を自由に語り伝える道を絶たれたのであった。従って、帰着人は、漂流時と帰着時の二度に亘って、自らの人生やその体験の表出に対して、制限を加えられたと言える。特に帰着時は、幕藩体制のまっただ中であつた故に、よけいにその制限は漂流時以上に、当事者には過酷であり、悲劇そのものであつた。その様は、背景や規模・内容から言つて、王立協会とは全くの異質のものであつた。しかし、根底には、どちらにも共通する心理が働いていたとは言えないであろうか。つまりは、権力のある者は常に、自らの身分や地位を守るために、様々な制限を設ける者であると。

さらに日本の場合、漂流の背景という点から見たとき、そこには日本独特の「鎖国」というより、より正確には「海禁」(p.25)が益々日本の船乗りを内向きにし、船の作りまでも内海航路を目的としたものだけに限定してしまつていた。つまり、造船技術の停滞であり、それに伴つて生じたと言える外洋航行技術の未発達を招き、極めつけは、先述したように、漂流の中から奇跡的に生還しても、幕府は「外国の様子、猥りに物語り杯致さず候様仰せ渡され」で、文章としての情報、それも遭難者自身の言葉な

8) 高山宏は第一章2で「なぜ、20世紀になってシェイクスピア・リヴァイヴァルが起きたのか」という問を立て、特に1960年代のシェイクスピア・リヴァイヴァルの立役者はポーランド人のヤン・コット著『シェイクスピアはわれらの同時代人』に端を発するという。(p.45) その理由としてヤン・コットはスターリニズム・ナチズムの洗礼を受けた世代であること、つまり政治的な抑圧の被害者であつたことにその理由があつたとしている。例えば『リチャード三世』などは、ヤン・コットにとっては、自らが置かれた状況下で初めて理解できたからであると。(pp.61-62)

どを語り継いで、次世代に伝えようとする発想はついに生まれなかったのである。それでも、たまたま帰還した船乗りを取り調べた各藩の役人たちはこまめに記録を取っていた。「かなりの数の漂流記録があることに驚いた」(p.11)と岩尾は言っているが、しかしここで我々は注意をしておかねばならない。岩尾が言っている「漂流記録」とは、漂民の生まれた土地の藩の取り調べであって、決して漂民自身の生の手記ではないことである(吉村昭、『漂流記』、解説：p.511)。どうも岩尾は、この1番基本的な点を忘れてるように思えてならない。ロビンソンやガリバーなどを持ち出して日英比較を行うという視点の導入は大いに参考になるが、「音読されればお分かりのように、今日の間延びした文章と違って、江戸時代の文章は引き締まった韻律をもつ。できるだけ原文の息吹を残しつつ、読者の胸に届けたい」と漂流記録それ自体をじっくり読誦することを岩尾は勧めているが、実はこの記録は藩の取り調べ書に残された形の整った文章なのである。その類の記録から本当に漂着した絶海の孤島で何があったのかは表面的に分かって、島で12年もあるいは20年以上も暮らさねばならなかった「人間の心情」までは分かるはずがない。またそこまでは藩の記録は語ってくれない。その空白を埋めるのが吉村の情熱の対象となったようである(『漂流記』、解説：p.511)。

漂流記録と漂民の手記との違い。なぜこんなことに拘るかと言えば、岩尾の熱意にもかかわらず、やはり藩が行った調書の文章は今日の我々には読みにくい。すべてとは言わないが、かなりの記録は、漢字がやたらに多く、当時の人間でも読み書きがある程度出来なければ、通して読むのは困難であったと思われるからである。役人の作った格調の高い調書、しかもなかなか公開されることのなかった記録。これらはすべて幕府の「海禁」政策にはピッタリとかなっていたに違いない。筆者の言いたいのは、岩尾の『江戸時代のロビンソン 七つの漂流譚』をすらすら読み通すのは実に骨の折れる仕事であると言うことに尽きる。岩尾の地の文は読めても、その流れが、丁寧だが執拗に繰り返される引用文(整った藩の役人の手になる取り調べの文章)に邪魔されるのである。

その点、記録は記録として自らの責任で読み取り、また実地探査を精細

に行って、登場人物の「心情」にまで押し入り、しっかりと漂流民の実像を浮かび上がらせて、人間の実存に迫るのはやはり作家しかないのである。また幸いなことに、作家吉村昭の『漂流記の魅力』は「若宮丸の漂流」のフィクション化にほぼ全体のページが割かれており、かつ本格的な同作家の小説『漂流』（500頁）のような長編小説でもない。わずか200頁足らずの文庫本であることも読者としては容易にアクセスし易い。そこで次の2章では実作者吉村昭の『漂流記の魅力』を取り上げて、この「漂流そのもの」について書いたと著者の言う一種のノンフィクションとでも名付くべき作品について検討してみたい。

第2章 『漂流記の魅力』の長所と短所

まず『漂流記の魅力』の目次から見てみよう。第一章 海洋文学、第二章「若宮丸」の漂流、第三章 ペテルブルグ、第四章 世界一周、第五章 長崎、第六章 帰郷の全六章からなる。

第一章の海洋文学では、イギリスと日本の場合の比較から入り、残りの五章はすべて「若宮丸」の漂流とその顛末に当てられている。岩尾と吉村の著作を比較してみると、海洋文学に関して、吉村はイギリスと日本との違いを「船の構造」だけに置いているに対して、岩尾は、船の違いというよりは「漂流（記）」そのものの中身、言い換えれば、漂流者にはロビンソンとガリバーという二種類のタイプが見られるという視点から、いつの間にかやら読者を、日英の比較（文化）の視座に導こうとしているように思われる。しかし、2人に共通している点は、日本にもイギリスに負けないくらいの「海洋文学」が存在した、あるいは、20、21世紀の現代に至るまで、ロビンソンに負けないくらいの海洋文学が誕生してきたし、今後もその後継的な作品が出てくるのではないかという一種の楽観論に収斂して行くようである。

ところで、実作者である吉村が、若宮丸という船に関する漂流記に特に創作意欲をかき立てられたのは一体何であったのだろうか。以下、『漂流記の魅力』を紹介しながらその理由を探ってみることにする。

若宮丸に吉村が特に惹かれた理由は、まず目次の次に挿入された「若宮丸・津太夫ら一行の世界一周地図」と、付録の年表をつけたことで想像がつく。地図は、「世界一周」という言葉が象徴しているように、18世紀の末にすでに世界一周を、意図せずしてたまたま成し遂げていた日本の船乗りがいたという驚愕すべき点にある。さらに、吉村自身が作成したわずか3頁に満たない「主な日本船漂流年表(江戸時代)」から分かることは、1695年(元禄8年)に大坂の淡路屋又兵衛船(15人乗り)が江戸に向かう途中で漂流し、あろうことか翌年にはカムチャッカ半島南部に漂着し、伝兵衛1人が生存、後に当地で日本語教師となったという記事から始まっている点である。その後も、次々と北方方面に漂着する例が紹介されている。例外として、1785年(天明5年)には鳥島という絶海の孤島に漂着し12年目に江戸に帰還した土佐の松屋儀七船漂流については、吉村自身がすでに『漂流』⁹⁾という長編海洋小説をモノする形で小説化されている。さらに、1841年(天保12年)には同じく土佐国の漁船が漂流、アメリカの捕鯨船に救助され、その中の万次郎はアメリカで教育を受けて帰国、幕末時には貴重な通辞として活躍しているし、所謂後に有名となる「ジョン万次郎」については、すでに評伝が出ている¹⁰⁾。

そんな中で、吉村の目にとまったのが、1793年(寛政5年)に奥州は

9) 昭和55年に初版が出ており、筆者の手元にあるのは平成20年に出た45刷改版である。初版から約30年経過しているが、45刷りを数えているのは、いかにこの小説が人気を博しているかという理由と言える。主人公と言える長平初め、実際には14人の漂民が、手作りの船「伊勢丸」で鳥島から八丈島に到着、その後江戸に向かっている。この小説の解説で高井有一は、吉村の鍛錬した描写の腕を、諸手を挙げて賞賛している。(吉村昭『漂流』新潮文庫)

10) 井伏鱒二の『さざなみ軍記・ジョン万次郎漂流記』(1986年)を初めとして、評伝の類など多数。井伏の作品は1937年に発表され、翌年に直木賞を受賞している。蘆溝橋事件、中国との全面戦争、そして四年後の太平洋戦争突入の時代であった。直木賞まで受賞したこの作品では、アメリカの捕鯨船ジョン・ホーランド号に救われ、やがてホイットフテールド船長に気に入られアメリカに渡るジョン万次郎とのやりとりなどに、やがて敵国となって無謀な戦争をしかける日本に対する批判的な見方を読み取ることも出来よう。それにしても、直木賞作品といえども、政治や軍の人間には何の痛痒を与える力もなかったのは、寂しいというよりも情けない。

石巻の「若宮丸」の漂流事故であった。先述したように、この船も江戸に向かうつもりであったが、北方方面に流されて翌年アリューシャン列島に漂着している。ところがこの漂着は思わぬ展開をもたらすこととなった。当時すでに日本との交易を望んでいたロシア側の意向に沿うように、津太夫ら4人の船乗りは当時の女帝にまで謁見させられ、やがて遣日使節レザノフの船に乗せられて長崎に帰着するのである。ただし、この帰国までには、あろうことか、この船は「世界一周」を行っていたのである。ジュースベルクの『80日間世界一周』は1872年（明治2年）に書かれているが、これはあくまでも空想小説の世界であった。その点、若宮丸の漂流とその後の数奇な運命は実際に起こった出来事であった。そこで、この若宮丸の漂流の発端の模様と漂着後のロシアでの彼らの生活の一端を描いた箇所、そして世界一周後再びペトロパブロフスクに戻り、最後に津太夫ら4人が長崎に向かうときのロシア人とのやりとりに注目してみたい。まず、若宮丸漂着の様子は以下のように記されている。

「若宮丸」(八百石積み、16人乗り、沖船頭平兵衛)は、寛政5年(1793年)11月27日、仙台藩の藩米二千三百三十二俵その他を載せ、江戸へむかうため牡鹿郡石巻を出航した。

風がないので、東名浦に寄港して風待ちをし、29日、順風を得たので同所を出航したが、天候が急変して激浪に翻弄されるようになった。風向きはしばしば変わり、12月2日、和船の弱点である舵が破壊された。

それからの経過は、他の破船と全く同じで、船が危険に瀕したので、乗り組みの者一同、剃刀で鬘を切ってざんばら髪になり、神仏の御加護を必死に祈った。位置は、塩屋崎の沖であった。

12月3日、風波はさらにつのり、覆没を予感した沖船頭は、帆柱を切り倒すことを決断し、それは実施に移された。(吉村昭『漂流記の魅力』、p.48)

「帆柱」を失った船は、ただ漂い流れるに任せるほかなかった。漂流後五

ヶ月が過ぎたある日、雪に覆われた高山を発見する。すでに投棄していた米の残りからわずか三俵だけを舢に乘せて彼らは上陸する。彼らが漂着したのは、アリューシャン列島の島であった。こうして仙台から見れば本来なら南の江戸に向かう船旅が、あろうことか、北へ、しかも極寒の地であるロシア大陸横断への入り口に漂着することとなったのである。

そして、その後の彼らの足取りの中で、船乗りたちが最初に足を踏み入れたのが先述した列島の「島」であった。その後、ナアツカという港に入るが「この地は、島民が海に猟に出て捕殺するラッコ、アザラシなどの獣皮をロシア本国に送る根拠地」であることが判明する。この港で船主をしていた男がガラロフという人物である。もちろん、本国から派遣されてきたロシア人の役人もいた。こうして、若宮丸の水主たちはガラロフらの保護を受け、住居はもちろん、食料も与えられる。やがてガラロフらの島での任期が終了するころとなり、これに合わせて水主 15 人も一緒に島を離れることとなる。途中、アムトチカという島に着船するが、この島こそ、若宮丸の漂着よりも 12 年前の天明 3 年（1782 年）7 月に、大黒屋光太夫¹¹⁾たちの乗った「神昌丸」が漂着した場所であった。しかし、ガラロフの船はこの島には停泊せず、目指したのは大きな港町であるオホーツクであった。この港はロシア大陸へのまさに入口であり、期せずしてロシアの「大地」に水主たちは足を入れたことになる。

かれらに乗せてきた船の船長が、役所に水主たちのことをとどけ出て役人に引き渡した。役所では都から派遣された代官が、多くの役人を指揮して勤務していた。

政府から日本の漂流民を保護するよという指令を受けていた役所では、町役人のものらしい家を水主たちの宿舎として提供してくれた。（同書、pp.54-55）

11) 大黒屋光太夫については、吉村昭が『大黒屋光太夫』（上・下）（新潮文庫、平成 17 年）という小説を書いている。無事江戸に帰還したこの光太夫と知己になったのが蘭学者大槻玄沢であった。

港には今日でいえば一種の税関のような役所が設置されていたことを物語る個所である。また、「日本の漂流民」を保護し、「宿舎」まで用意するという指令が政府から出ていたのは、すでに、この当時ロシア政府が日本との貿易・国交を目指していたことを示している。方や、当時の日本ではまさに鎖国状態が盛んな時代であったのと比較すると、ロシアとの違いが明白である。宿舎での食事は、朝食は麦餅と茶だけであったが、昼食と夕食は牛肉を煮たものが与えられている。また「モロコ」という牛乳や、牛乳から作る「マスラ」というバターを麦餅に塗って食べた。このあたりの食文化の違いなどは大変興味深い描写となっている。また、日常生活に必要な言葉であるロシア語を彼らは少しずつ覚えていったようである。新しい言語の習得をしようとする学習者にとって、その置かれた環境が如何に大きく左右するかという点についても、古くて新しいテーマを目の当たりに見る思いがする。

こうしてオホーツクから始まった水主たちの旅はやがてヤクーツクからイルクーツクを経て、ついに皇帝の居住するペテルブルクにまで行き着く¹²⁾。もちろん、15人全員がペテルブルクまで行ったわけではない。津太夫、儀兵衛、左平、太十郎、茂次郎、巳之助の六名であった。皇帝に拝謁する前に高官の屋敷に寄宿し、屋敷の当主である侯爵に次のように問いかけられる。

「貴方タチハ、日本ヘカエリタイカ。ソレトモコノ国ニトマリタイカ。イズレトモ望ミ次第。各人ノ通りニナサルノガ、ワガ皇帝ノ慈悲ニミチタ思召シデアル」(同書、p.85)

といった問いかけが通詞を通して質問される。そして次に皇帝とのやりと

12) 広大で厳寒のロシア大陸を横断するというとてつもない若宮丸の水主たちの体験は、30数年前に初めてシベリア上空をアイルフロート機で飛び、シュメニチ空港で休憩、その後イギリスへD. H. ロレンス探訪の旅に向かった筆者の記憶を新たにしてくれた。また、先の敗戦時にシベリアで抑留され、無事帰国した筆者の友人(既に、死去)が語ってくれた辛く悲しいシベリア体験談を改めて思い起こさせてくれた。

りでおもしろいのは、帰国を切に願っていた茂次郎、巳之助の2人が「私どもは御当国にとどまりたく存じます」と心変わりを訴える。津太夫、儀兵衛、左平、太十郎の4人は驚く。しかし、帰国を願うこの4人が結局は、ロシア側の思うつぼとなるのである。というのは、ロシアにとどまりたいという船乗りよりは、日本への帰国を希望する水主たちこそ、ロシア側にとっては、日本との交易開始の絶好の「人質」になると考えられたからである。

「ソウデアロウ。帰りタイト思ウノハ、甚ダモットモノコトデアル」（同書、p.93）

と、皇帝の言葉として吉村は引用した後、皇帝はあきらかに帰国を願う津太夫ら4人に好意と関心をいだいて、ロシアにとどまりたいと申し上げた善六たちには目を向けることもしなかった、と記している。この日を機に、帰国組は「珍シイ見世物」を次々と拝見することとなる。例えば、「気球見物（今日の熱気球）」をはじめとして「プラネタリウム（天象儀）」や「劇場見物」等、とても日本では見られないものを目にするという特権に与っている。

ではなぜこれほどまでに、帰国の4人が厚遇を受けたのか。その背景として吉村は『環海異聞』を根拠に、11年前の寛政四年（1792年）9月に大黒屋光太夫と小市、磯吉が遣日使節ラックスマンと根室に到着した。つまり、一度はロシアに漂流民として漂着した大黒屋光太夫たちは、はじめて日本に帰り着くこと出来たという歴史があったことに注目している。ところが、当時の日本では外国の国書提出と交易要請の申請手続きはすべて長崎でしか受け付けなかったのである。そこで、根室では駄目だが、再来日の場合に備えて長崎入港を許す「信牌」を与えていたのである。この信牌が今回の4人の厚遇に繋がっていたのである。

ロシアは、交易要求の使節を再び日本に派遣することを企てた。それには、ラックスマン使節が光太夫ら漂流民を送り届けたように、漂流民

を連れてゆく必要がある。ロシアが日本の漂流民を暖かく保護し、さらに船を仕立てて帰国させたことで、幕府の心証を良くし、それが通商成立に結びつくと判断した。(同書、p.102)

と吉村は解釈しているが、妥当な考え方である。

以上は、たまたま帰国組に入った4人に対するロシア側の対応の一部始終であるが、残留組もいたことに吉村の目は平等に向けられている。病死した者、あるいは現地でロシア人女性と懇ろになり結婚、永住を希望した者などもいた。もちろん、彼らはロシア正教に改宗している。そのあたりの詳細については省略したい¹³⁾。確かに、残留組の消息もそれなりに興味深いが、津太夫ら4人が長崎に向かったときのロシア人とのやりとりにこそ、実は今日ますます要求される「異文化間コミュニケーション」のテーマが具体的に出ており、今後の日本人のあり方にも示唆を与えてくれるヒントに満ちている。そこで、以下、異文化間の意思疎通の問題について考えてみよう。

第四章「世界一周」は、次のように始まっている。

使節を乗せた「ナジェジダ号」は、6月16日、僚船「ネワ号」とともにクロンシュタット港を出帆した。

「ナジェジダ号」は、使節、津太夫ら日本人漂流民、船長クルゼンシュテルン以下乗組員総数85人、「ネワ号」はリシャンスキー船長以下48人であった。

13) ロシア残留組と帰国組の船乗りについて一番印象的なのは、同じ日本人同士故の、確執が強く感じられるという点にある。例えば、イルクーツクに着いた若宮丸の水主の前に現れたのが新蔵と庄蔵という2人の日本人であった。彼らは大黒屋光太夫の仲間で、新蔵は洗礼を受けてイルクーツクに残留、日本語教師として働き、それ相応の報酬を受けていた。そこへ今回の日本人がやってきたというわけである。もう1人の人物が庄蔵で、凍傷で片足となり義足をつけた男である。彼もまた光太夫の仲間の船乗りであった。この新蔵と庄蔵との間で確執があった。新蔵はロシアに根を下ろそうとしているのに、庄蔵は感情的になり故国に帰りたいということを繰り返しては愚痴るからであった。(同書、pp.62-63)

津太夫ら 4 人は、複雑な思いであった。ロシア残留を希望した中心人物の善六が、以外にも「ナジェジダ号」に乗っていたのである。(同書、p.108)

最後の部分「ロシア残留を希望した中心人物の善六が、以外にも『ナジェジダ号』に乗っていたのである」の「善六」については少し説明が必要であろう。もともと日本文の読み書きも良くでき、頭脳もよかった善六はトコロフというロシア人の通詞と新蔵の勧めで洗礼を受け、日本語の通詞訳としてロシアに残留する意思を表明していた人物である (p.64)。ところが、この善六がナジェジダ号に便乗して帰国の途についたのである。津太夫たちには不愉快であったが、すべては使節レザノフの指示であった¹⁴⁾。

かくして船はバルト海を進み、やがてデンマークのコペンハーゲン港に入る。そして次に入った港がイングランド南西端のファルマス港であった。その後船はカナリア諸島の一つテネリフェ島サンタ・クルス港（イスパニアの属領）に入る。船はそのまま南アメリカはブラジル東岸にあるサンタ・カタリナ港（ポルトガルの所領）に進む。その後は、イースター島、マルケサス諸島、ハワイ諸島を経てカムチャッカ半島にあるペトロパウロフスクに到着する。そして千島からいよいよ薩摩、長崎を目指しての船旅が始まる。そしてこの日本の海岸に沿った船旅では、ロシア士官と津太夫たちとの会話が特に興味深い。まず、南進を続けやがて江戸の沖合を過ぎた頃、かすかに島影が見える。このときのロシア士官と津太夫のやりとりを見てみよう。

「コノアタリニハセツノ島ガアリ、ソノ中ニ八丈トイウ島ガアル。良ク知ッテイルダロウ」

「知らない」

「織物ヲ産スル八丈島ヲ知ラヌトハ……」と、呆れたように言った。(同

14) 善六は、つぎつぎと仲間 6 名に言葉巧みに洗礼を受けさせた憎むべき存在で、そのためかれらは帰国の道を断たれた。その善六が、「ナジェジダ号」に乗って日本へ向かっている。(p.114)

書、pp.17-128)

特に、後半の八丈島の名を聞いた津太夫は、士官が日本のことをよく知っているのを感じた、と吉村は書いている。そこで、八丈島に関する情報を持たなかった当時の水主たちの実態について吉村は、

廻船で荷を江戸に運ぶ時は、江戸湾の湾口で遭難事故が多発しているため、相州（神奈川県）の三崎か豆州（静岡県）の下田まで行き、西南の風を得て引き返し、江戸に入ることが多かった。それは陸岸ぞいの航海で、沖にどのような島があるか知らない。（同書、p.127）

と当時の水主たちの海に対する情報の欠如の理由を指摘している。

今ひとつ、興味深いのは船が薩摩に近づいた頃のやりとりである。

「薩摩ダ、知ッテイルカ」

と、言った。

もとよりその附近を航行したことはなく、知らぬ、と答えると、

「自分ノ国内ノコトヲ何モシラヌトハ、不可解ダ」

と、嘲笑した。（同書、p.128）

傍点を施した部分を読んでいると、筆者は「なぜか日本人は仏教のことも、着物のことも、三味線のことも知らなくなってしまったのです。伊勢神宮や床の間や、連歌やむ国学や日本の数学者のこともあまりよくわかってはいません。それだけでなく、日米安保条約が何を足枷にどれくらい続くのか、中国がどんな現代史のなかにいるのか、世界中のマグロと日本はどうつながっているのか、そういうこともわからない。……」と冒頭部分で引いた松岡正剛の言葉を思い起こさざるを得ない。江戸時代の水主たちも、現代の平均的な若者（のみならず、平均的な日本人が）も同じように、自らの置かれた位置・文化等々に対して無知であることを、何とも思わないような精神構造が連綿として続いているように思われてならないの

である。特に、海洋民族である日本人が海洋について無知であるのはどうしてであろうか。ただし、今ここでこの点について論じるのは論旨から外れるので将来の問題として考察したいと思うが、筆者と同じような問題意識を例えば有名な民俗学者であった柳田國男は夙に指摘していたし、石井研堂コレクションの第1巻『江戸漂流記総集』の《対談》で鶴見俊輔と山下恒夫が似たような議論をしている、ということとどめておきたい¹⁵⁾。

第3章 『江戸時代のロビンソン 七つの漂流譚』と 『漂流記の魅力』の比較から見えてくるもの

自国の文化、自国が置かれた位置に対して無知であると、どういった事態が生まれるのか。第2章の終わりの部分で見た、ロシア人の船員と日本の水主との海に対する、あるいは近海に対する知識・情報量の違いは一体何を意味しているのか。一事が万事の諺通り、海に対する無知は、陸の上の出来事にもその悪影響を及ぼしているように見えて仕方がない。例えば、先述の若宮丸が長崎に帰着した後の幕府の役人が見せる態度には目を覆いたくなるような対応ぶりが顕著である。

長崎奉行所による「訊問」では、厳しいキリシタン禁制を敷いていた日本であるので、もしキリスト教に改宗しておれば極刑つまり磔刑に処せられることになっていた。16人の仲間のうち6人もギリシヤ正教の教会で洗礼を受けたことが知られれば、津太夫含めた4人にも疑いをかけられる恐れがあるので、残りの12名はロシアでちりぢりバラバラになり、しかも2人は老齢のため歩行もままならず、といった偽りの話を作り上げ

15) 梶木剛『柳田國男の思想』（勁草書房、1990年）：海上の道という箇所では柳田の一節を引いて梶木は「東アジアの一島嶼に生まれ育ちながら、海上生活に無知であったというのは、本当に『異常』である。原因は何であろうか。」(p.617)という問に始まって、日本人の自己疎外の問題にまで触れているのはなかなか刺激的な問題提起である。もう一つ、鶴見の意見で「漂流譚を読むと、日本の在来人間が、それも書物による外国の知識のない人間が、まったくの偶然で、外国を見てしまう。俗説も偏見も持たずに見てしまう。これはインターナショナルなんです。」(p.28)という指摘には目から鱗が落ちる感じが強くする。

かたく口裏を合わせていた。このあたりは、いくら祖国に帰ってきて、おいそれと入国を許されないという当時の実情に即しており、津太夫らを責めることは出来ない。しかし、さらに現実は厳しかった。湾内に停泊させられ正式な上陸すら認められないまま「むなしい日々」(p.142)が過ぎて行ったからである。先にロシア側が津太夫たちをVIP扱いした理由を述べたが、日本の役所も馬鹿ではなかった。つまり、ロシア側が日本との交渉の材料に漂流民を利用しようとしていることを十分に察知していたからである。

「漂流人共エハ、決(シ)テ応対等」しないように、「(正式の)御下知(命令)迄は糺等不致」と厳命していたのである。(同書、p.143)

と吉村は記している。もっともナジェジダ号の船体の損傷箇所が甚だしいので、修復中ということで乗組員や津太夫たちは梅が崎に一時的に上陸は許されていたが、上記のような一種の謹慎令(蟄居令)を敷かれていたのである。そのうちに一つの事件が起こる。太十郎が剃刀をつかんで、切っ先を口の中に入れ咽喉のあたりまで突き立て、かき回したのである。かろうじて一命は取り留めたものの、要するに、生国の厳しい扱いに絶望した男の自殺未遂であった。使節レザノフは、これを契機に漂流民を一刻も早く受け取って欲しい旨役人に伝えるが、「すべて江戸の幕府の御意向を仰がねば即答できぬ」とだけ役所側は答えている。このようなやりとりは、もう一度あるが、2回目も同じ答えであった。(pp.149-151)

そしてついに江戸に動きがあった。かの有名な目付遠山金四郎が長崎に向かったからである。そして裁きの結果は「我国 海外ノ諸国ト通問(商)セザルコト既ニ久シ」として、到底レザノフの通商要求は受け入れられないという内容であった。遠山といえども、結局は幕府の単なるマウスピースでしかなかった、という点に筆者は新たな遠山像を目の当たりにした思いがし、歴史の厳しさを吉村の小説を通して教えられた。

最後に『漂流記の魅力』で、これは著者吉村の観点であるかも知れないが、彼が幕府方というよりは、漂流民の側に立ってこの小説を書いたこと

を明瞭に物語る箇所がある。長崎を発って江戸に到着した太十郎をのぞく津太夫ら3人を待ち受けていたのは仙台藩下屋敷の長屋で、彼らは藩医大槻玄沢の問いに答え、記録をとられている。こうして大槻玄沢は『環海異聞』（文化4年、1804年）として纏めている。この『環海異聞』にもとづいて吉村は若宮丸漂流の足跡を克明に現代にまで辿っている。例えば、自殺未遂をはかった太十郎の子孫を訪ね、彼の服の確認と墓に詣でることで、きちんと歴史的な事実をカバーしている。(pp.175-180) このあたりに、いかにもフィールド・ワーク、つまり克明な取材を大切にする吉村の姿勢が良く出ている。まさに岩尾の指摘していた「現実的想像力」であり、「物質的想像力」¹⁶⁾をそのまま実践しているのが吉村昭という作家の特色である。だからこそ、最後に近いところで、「無学と教養」と題して、吉村が大槻玄沢を批判するような言説を書くこととなったようであるが、吉村の意見には妥当性があり、人間を見る確かな目の必要性が強く感じられる。

津太夫、儀兵衛、左平の口述を『環海異聞』としてまとめた蘭学者大槻玄沢は、執筆を終えた後の感想で、津太夫たち3人が無学であり教養に欠けている、と評している。(p.181)

なぜ津太夫たちが無学であり、無教養であると大槻は断じたのか。その点について吉村は公平な立場からその理由を説明している。一番の理由は、大槻が13年前に出会った大黒屋光太夫のことを知っていたからであるとしている。なぜなら大黒屋は元々名門の商家の生まれであり、沖船頭職を勤めるなどもし、漢字の素養もあり、乗船の際には浄瑠璃本、国語辞書なども手元に置いて愛読していたと言われている。ロシアに漂着後も、

16) 古い記録を読み抜くに当たり、鍵を握るのは物質的想像力である。文学の骨格を形つくるのは、しばしば誤解されているような空想的想像力 (fanciful imagination) の跳躍的発露などではない。……テキストの奥に社会歴史的コンテクストを読み抜く物質的想像力 (material imagination) こそが、文学を理解し、また新たな文学を再生産する骨格を形つくるのである。岩尾龍太郎『江戸時代のロビンソン』(pp.14-15)

会話はもとよりロシア文字も覚えて綴れるまでになった。要するに光太夫は「教養人」であったのだ。だから、玄沢が津太夫ら3人を無学で無教養としたのは、光太夫との比較上でのことで、それは「基本におかしい」と、吉村は明確に断じている。

廻船の船頭の勤めと水主との違いは、その職種から言って当然のことであった。船頭は、船主などから託された荷を送り届ける職務を持っているだけに、漢字の読み書きと数量計算も出来て当たり前であった。一方、水主たちは船頭の指示に従って船を操るのが仕事であったから、漢字など知らなくてもいっこうに差し支えなかったのである。もちろん、生活上必要が生じれば、日常の会話くらいは彼らだって出来たのである。吉村は、大概玄沢その人よりも、彼の克明な記録である『環海異聞』が語りかける事実注目しているのである。ロシア大陸を縦断する形で、極寒の大地を「漂流」した彼らは、それぞれの土地の特徴、家屋、飲食、服飾、教会、産育、婚礼、祭礼、官庁、政治、軍事、刑獄、銭貨、尺度、楽器、医療等々、実に多岐に亘る記憶を玄沢に伝えていたのである。ロシア語そのものについても、700近いロシア語の単語と簡単な会話が記されている、と吉村は指摘している。そうして、最後に吉村は、

これらの内容はまことに見事で、津太夫ら3人の生来の頭脳のよさをしめしている。物事を見る眼のたしかさに感心する。

無学呼ばわりする玄沢は、水主というものに対しての基本的理解が欠如し、そのような感想をいだいたのだと解したい。(p.183)

と玄沢に対する批判を冷静に、また強くしているのが印象的である。

そして最後に吉村は「漂流記の研究」と題して、漂流民ゆかりの土地で現代も地道に続けられている「研究会」の紹介をしている。こういった研究会は各地に存在し、時には漂流先の外国に出かけていって熱心に調査研究を行っている。また、漂流記を学問的に研究する学者もたくさん存在することも事実である。古くて有名なのが石井研堂の『異国漂流奇譚集』である。また川合彦充の『日本人漂流記』は史実調査に優れていると、吉村

は紹介している。これらは史実をもとにした秀れた記録文学の遺産である。「生と死の切実な問題を常にはらみ、広大な海洋を舞台にし、さらに異国の人との接触と驚きにみちた見聞。その規模はきわめて壮大で、これらは第一級の海洋文学の内容と質を十分にそなえている。……漂流記は、日本独自の海洋文学なのである。」(p.185)とまで言い切っているのである。

しかし、ここまで言い切れるのにはやはり実作者であった吉村昭であればこそという感がしないでもない。第1章で検討した岩尾龍太郎の『江戸時代のロビンソン』もそれなりに海洋文学の再発掘を目指した点で、読者に感動を与える内容を持っていた。注の16に記したことを繰り返すことになるが、今度は全文を引いてみよう。

「古い記録を読み抜くに当たり、鍵を握るのは物質的想像力の励起である。文学の骨格を形作るのは、しばしば誤解されているような空想的想像力の跳躍的発露などではない。つねに後世の緩和にして凡庸な解説によって隠蔽変形されてしまう事実を、荒々しい姿に呼び戻す現実的想像力(factual imagination)、テキストの奥に社会的歴史的コンテキストを読み抜く物質的想像力(material imagination)こそが、文学を理解し、また新たな文学を再生産する骨格を形作るのである。」と岩尾が言うとき、この指摘は実に的確なものである。しかし、「新たな文学を再生産する」のは、残念ながら学者ではなく、実作者・作家その人の仕事である。その意味では、岩尾の著書は道先案内書としては、実に良くできているが、実際に日本の「海洋文学」、それも荒々しくも新たな人生の見方を提示してくれる可能性あるのは、例えば吉村の『漂流』であり、必ずしも海洋とは言わずとも、日本国内における一種の「漂流」を扱って優れた、同じ作者の作品『長英逃亡』である。

筆者は、今回たまたま機会を得て、この2書を読破することが出来た。作品の筋としては、後者の方が「動き・変化」があつて息つく暇もないほどの緊張感溢れる作品となっている。他方、前者は、絶海の孤島での漂流民の生活ぶりを追っただけに、ある種の「単調さ」は免れないが、それでも、漂着民の閉塞感はヒシヒシと伝わってくる。また、彼らが上陸した島

島にはアホウドリの大群がいたが、この鳥こそ漂流民の命をつなぐ貴重なタンパク源となっている。しかも、そのアホウドリの生態に関する精細な描写では「鳥の現れる場面では、腥い匂いのする羽毛に身体をくるまれるような、不気味な思いを幾度か味わった」と、高井有一は解説で記しているが、これなどはまさに「物質的想像力」の最も花開いた箇所である。ところで、三田村信行は井伏鱒二の『ジョン万次郎』の解説で次のようなことを書いている。

すぐれた文学作品の条件とは、どういうものでしょうか。社会や人生について深く考えさせるテーマがとりあげられていることでしょうか。それとも、登場人物が生き生きとえがかれていることでしょうか。

そのどちらでもあるし、どちらでもないといえます。つまり、そうだったことは文学を考えるうえであまりたいした意味をもたないということです。

と、かなり意表を突いた発言をしている。そして、次の発言は文学のあるべき姿に言い及んだものとして実に貴重な視点である。

すぐれた文学作品のもっとも基本的な条件は、その作品を読み終えたとき、自分のまわりの世界がほんのすこしちがって見えるということだ。どんなふうがちがって見えるかは、その人のそのときの心の状態と、作品の質によってちがいますが、すくなくともそうでなければ、すぐれた作品とはいえないでしょう。¹⁷⁾

「自分のまわりの世界がほんのすこしちがって見える」とは言い得て妙である。これを今日的な文学的用語で言えば、「異化作用」¹⁸⁾のことを言っ

17) 井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』（偕成社、2008年）三田村信行、「解説」、p.213 参照。

18) 異化作用 [dissimilation] (1) ある程度違う2つの要素が近接する場合、双方の共通点が減じ差異が一層増大すること。(2) [生物] 生体内の物質交代において、複雑な化合物を、より単純な物質に分解する反応。— ↗

ていると考えて差し支えないと思われる。三田村の文学の本質を突いたと思われる発言は、実はすでに 20 世紀初頭の代表的なイギリスの作家 D. H. ロレンスが既に気づき、指摘していたことと通底する。イギリスと日本という違いはあっても、同じ実作者であった D. H. ロレンスの芸術観を読んでみると、普遍的な問題意識は彼我の違いにかかわらず実によく似ていると言わざるを得ないのである。ロレンスの小説観あるいは【良書観とは何か】：①生への独自のヴィジョン（先見性・洞察力）を明らかにしていること。②「意識の神秘」に大胆にも全幅の信頼を置いているかどうか、もしくは「新しい自覚を示すものか」どうか、にある。特に最後の新しい自覚を示すものがあるかどうかという点に、三田村が言う文学あるいは芸術の共通点がある。ただ、ロレンスの場合は「モラル」という言葉を使っているところが少し難解である。彼の「モラルと小説」というエッセイの冒頭部分では、

芸術の仕事は、人間と人間を取り巻く宇宙との生き生きとした瞬時の関係を明らかにすることである。人間はいつも古くさい関係にとらわれているが、芸術はいつも「時代」の先端に立っている。そして時代とはといえば、生き生きとした瞬時よりずっと遅れてやってくるものだ。

ヴァン・ゴッホはヒマワリを描くとき、人間としての自分と、ヒマワリそのものとしてのヒマワリとの瞬時の関係を達成するのである。彼の絵はヒマワリそのものを描いているのではない。ヒマワリそのものの本質など、われわれには決して分からないのだ。ヒマワリの姿、形なら、カメラのほうがヴァン・ゴッホよりはるかに完璧に写し出して（原文イタリックス）くれるだろう。¹⁹⁾

∨ 一般に異化の反応過程は、エネルギーの放出反応であり、その代表例が呼吸である。(3) [ドイツ語で *Verfremdung*] 演劇美学の用語。日常慣れ親しんでいる文脈から物事をずらして、不気味で見慣れぬものにする。ブレヒトの異化効果が典型で、一種の目覚まし作用を意味する。要するに「異化作用」とは、見慣れたものでもちょっと視点を変えれば、全く目新しい見方を提供するような働きを言う。

19) D. H. ロレンス「モラルと小説」(『不死鳥』下巻)(山口書店、1986年)、p.189

以上の部分から、ロレンスの考えていた「芸術」と三田村の言う「すぐれた文学作品」との共通点が了解できるのである。ゴッホのヒマワリの絵の描写がなぜ人を引きつけるかと言えば、それまでの「古くさい関係にとらわれて」いた人間ではなく、新たな関係を持った人間の躍動感つまり「ヴィジョン」が、その絵には横溢しているからである。キャンバスの上にあるヴィジョンは、ヒマワリとヴァン・ゴッホ自身から生まれたもので、まったく手に触れることは出来ないし、言葉で説明出来ない「第3のもの」なのである。「日常慣れ親しんでいる文脈から物事をずらして、不気味で見慣れぬものにする」と異化作用の定義にあるが、必ずしも「不気味で」である必要はないであろう。要は、本当に生きるということは、自分と他者との間に「生きた関係」が樹立されているかどうかにはかかっているからである。

お わ り に

以上、今回は漂流記つまり日本の海洋文学に焦点を絞って、特に吉村昭の研究書とも小説とも断定できない『漂流記の魅力』と、作品になる前の漂流記そのものの資料に当たって地道に研究の道を歩んでいる岩尾龍太郎の労作との比較を行ってきた。岩尾の『江戸時代のロビンソン』には、漂民の手記というよりは、彼らの生まれた藩の取り調べ調書が中心に取り上げられていたため、本当に当の漂民の心情にまでは届いていないのではという疑問があった。揺れる漂民の心情は、彼らが過酷な島の生活環境の中で、どのような「関係」を大自然との間に築いていったかの克明な描写を通してのみ、読者に生きた形で届く。確かに、『漂流記の魅力』には、小説と一種の研究書を併せ持った特徴があったため、岩尾の『江戸時代のロビンソン』と似た点もなきにしもあらずであった。それでも、『漂流記の魅力』は「物質的想像力」に訴え、また漂民の心情の描写もその物質的想像力の上にとしっかりと築かれていた。『漂流記の魅力』は謂わば、実作者吉村が理想とする小説の書き方あるいはその原動力の働く様子を、如何にして創造してゆくのか、つまり作者の手の内を丁寧に読者の前に提示した

作品と捉えることが出来る。

従って、同じ吉村の大作小説『漂流』を読んでも、この作者の作法が手に取るようによく分かるのである。例えばアホウドリとの遭遇、唯一のタンパク源としての鳥の発見、また、彼らが所謂渡り鳥であるという発見は、冬の間に備えて、干し肉制作の必要性を彼らに強いることとなるが、まさにギリギリのサバイバル故、生きようとする彼らの必死の心情が痛々しいほどよく伝わってくるのである。要するにこの小説は一貫して、人間と自然との闘いの物語であるのだ。単調な島での生活故にこそ、絶えず「新たな関係」の発見に、特に主人公長平の全神経は研ぎ澄まされて行く。もちろん、仲間同士の葛藤も多々あるが、この小説全体から伝わってくる振動は、限られた、かつ過酷な環境の中でも、自然と人間が生きた関係を築いて行く糧はあるのだ、といったしっかりとした小説観に裏打ちされているように感じられるのである。ただ、先述したように、研究者岩尾龍太郎の視点であるイギリスと日本の海洋文学の比較、具体的には「ロビンソン」型と「ガリバー」型の分類の仕方は大いに参考になる。

このような岩尾の謂わば「尺度」を活用しながら漂流記小説を読み込んで行けば、漂流型は漂流型の中でどのような「関係性」が見られるのかという興味に繋がり、またガリバー型は異国での生活で、どのように漂流民は異国の人々と意思疎通を図っていったのかという、一定の方向付けをした上での読み方が可能となる。どちらの型であっても、小説はロレンスの言うとおり、人間と対象物（人間、大自然、異種の文化・文物）との間の生きた関係が描かれているかどうかにかかっているは言うまでもない。また、吉村のように「物質的想像力」があるかどうか、漂流小説を読む時の一つの大事な視点となるであろう。

このように考えてきたとき、日本の海洋文学は、優れた小説となつてすでに世にその成果を問うた作品が幾つか出ている分野であると言えよう。また、今後もさらに素晴らしい作品が誕生してくる可能性を秘めた分野であるような気がしてならない²⁰⁾。

20) 日本近世漂流関係文献目録の作成者加藤貴の目録によると、小説・随筆の類に関して、著名な作家を次のように列記している。井上靖、井伏 Ⅷ

引用・参考文献

- 岩尾龍太郎『江戸時代のロビンソン 七つの漂流譚』（新潮文庫、平成 21 年）
吉村 昭『漂流記の魅力』（新潮新書、2003 年）
松岡正剛『17 歳のための世界と日本の見方』（春秋社、2006 年）
高山 宏『近代文化史入門 超英文学講義』（講談社学術文庫、2007 年）
加藤憲市『イギリス古事物語』（大修館書店、1994 年）
松岡正剛著『NARASIA 日本と東アジアの潮流』（丸善、2009 年）
吉村昭『漂流』（新潮文庫、平成 20 年 45 刷改版）
井伏鱒二『さざなみ軍記・ジョン万次郎漂流記』（1986 年）
吉村 昭『大黒屋光太夫』（上・下）（新潮文庫、平成 17 年）
D. H. ロレンス『不死鳥』下巻（山口書店、1986 年）
山下恒夫再編『石井研堂コレクション 江戸漂流記総集』第 1 巻（日本評論社、1992 年）
加藤貴校訂『漂流奇談集成』（国書刊行会、1990 年）
新村出『南蛮更紗』（平凡社、1995 年）
梶木 剛『柳田國男の思想』（勁草書房、1990 年）
吉村 昭『長英逃亡』（新潮文庫、上・下、平成元年）
吉村 昭『アメリカ彦蔵』（新潮文庫、平成 13 年）
吉村 昭『島抜け』（新潮文庫、平成 14 年）
吉村 昭『大黒屋光太夫』（新潮文庫、上・下、平成 17 年）
中野好夫『ガリヴァ旅行記』（新潮文庫、昭和 58 年）
Edward D. McDonald (ed.), *Phoenix: The Posthumous Papers of D. H. Lawrence 1936* (The Viking Press, 1968)

-
- ㄨ 鱒二、織田作之助、北杜夫、幸田露伴、三浦綾子、吉田精一、吉村昭等の名が挙がっている。（加藤貴、『漂流奇談集成』、pp.512-553）以上のような作者以降、最近の若い世代の作家に関しては、筆者は寡黙にしてまだ新たな海洋文学の出現を聞いていない。しかし、イギリスの海洋文学つまり『ロビンソン・クルーソー』と『ガリバー旅行記』が、世界に先駆けて二つのタイプの旅行記の原型を創ることに成功したとすれば、日本の海洋文学はひょっとしてイギリスの海洋文学のレベルを超えた内容の作品をすでに生み出してきたと言えるのではないか。確か 1980 年代に日本に来た時の首相マーガレット・サッチャーが日本の商工会の招きで行った巧みなスピーチが想起される。その骨子は、英国は様々な製品の「原理」の発見に優れた業績を残してきたが、日本はその原理を「商品化」することに成功した商売上手な国であると。海洋文学というジャンルに二つの原型を刻んだイギリスに対して、例えば、吉村の海洋文学はその応用に力を発揮したすぐれた日本文学のひとつと、言えるのではないか。

Daniel Defoe, *The Life and Adventures of Robinson Crusoe* (Penguin Books, 1965)

Jonathan Swift, *Gulliver's Travels* (Penguin Books, 1970)